VTWシリーズ１　『蒼金の小銃』

石崎京悟

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＶＴＷシリーズ１　『蒼金の小銃』

【Ｎコード】
Ｎ８９０４Ａ

【作者名】
石崎京悟

【あらすじ】
天使の通り名を持つ男「ヨフィエル」彼がその名の通り、さまざまな顔を持つのはワケがあった。

第一篇（前書き）

事件屋とは、街で起こる様々な「事件」を解決する者達の総称である。

第一篇

「いいかい？　男ってのは好いた女一人に優しくしなくちゃだめなんだ」
酔っぱらった母は、舌っ足らずな口調でそう言った。
伸ばしっぱなしの金色の髪と、碧の瞳。
動くたび煙草と香水の香りが揺れる。
「誰にでも優しかったら、駄目なんだよ」
僕の眠るベッドのふちに腰かけ、一口付けたグラスに、再びボトルを傾けた。
空だった。
母は舌打ちすると、新しいバーボンを取りに席を立つ。
戻ってきて酒を注ぎ直すと、うまそうにそれを飲み干した。オレンジ色の部屋の明かりに、グラスがきらきらと光る。
そこで、僕は聞く。
「どうして、みんなに優しいと駄目なの？」
言うと、母は優しく笑った。
「さーてね？　アンタはどう思うの？」
「分からないから、聞いてるんだよ！」
もったいぶる母に僕が怒ると、母は口を大きく開けて笑った。
何がそんなに楽しいのか。
自分の子供をからかって、笑うこともないだろうに。
母は、僕が本気で腹を立てているのを見て取ると、ばつが悪そうに、
「だってねえ……不安になるじゃないか。好きな男が誰にでも優しいってのは。私だって、不安なんだよ。アンタも誰にでも優しい。母親の私にだけ優しくして欲しいじゃないか」
そう言って唇の端をゆがめた。
「そんなのワガママだよ！」

理由を聞いてさらに怒る僕。
すると、母は表情を変えた。酔いに潤んだ瞳で、僕を正面から見据える。思わずたじろいで、何か言おうと口ごもっていると、
「アンタの言ってる事も、ワガママなんだよ」
ささやくような声で続けた。
「アンタが人に……みんなに優しくするってのは、誰が決めたんだい。私かい？　それとも神様とでも言うのかい？　違うね。アンタがそうしたかったんだ」
ワケが分からない。と言うか、そんな理不尽な事を理解したくない。
「納得いかないって顔をしてるね？　ま、それもいいさ」
オヤスミと言ってキスをして、部屋を出ていく。寝た子を勝手に起こして、好き勝手に舌足らずな管を巻いて去る。

今思えば、オレはそんな母が好きだった。とても、『母』という言葉は似つかわしくない女性だったが、それを大人になるまで気付かない程……いや、気付いた今でも、魅力的な女性だと思っている。

そんな母を持つオレの仕事。
「ヨフィエル～。こっちで飲みましょうよぉ～！」
「えぇマダム、後ほど」
ホスト。
「ぐ……テメエ、長生きできねえぜ」
「する気もないさ……」
事件屋。

金を稼ぎ、情報を集めるには、闇に身を沈めるしかなかった。
女たちのおしゃべりと唾を浴び、手足の指を足しても足りない人間の返り血を浴び、汚れきった身体を更に汚していく。

その自虐的行為の先にあるのは、母の仇討ち。

ある日ふいに、母はいなくなった。
事件屋だった母が、ヤバイ人物に喧嘩をふっかけて返り討ちに遭ったのは間違いなかった。
相手は余程の大物らしく、そいつの正体を追い始めてから、オレも命を狙われるようになった。
だが。
母を殺した奴の正体を探るため。
そしてそいつを殺すため。
いくつもの顔を使いわけ、オレは今日も、夜の街に出る。

第二篇

「ヨフィエル、お客さんだ」
主任のマーカスに耳打ちされた。
薄暗い店内は煙草の煙でうっすらとモヤがかかり、オレを指名したという、奥のテーブルの客の姿は見えない。
オレは相手の客にワビて席を立った。にっこり笑って内心で毒づく。
（なーにが「ヨフィエル行っちゃうのぉ？」だバカ女。何でココに来る女は、こうも自分の年も考えない下劣で悪趣味な女ばっかりなんだ！　大体……）
とか考えてるうちに、指名されたテーブルに着いた。
「ご指名ありがとうございます。ヨフィエルで……」
客を見て驚いた。
知った顔が、そこでグラスを握っていた。
丸ツバの帽子、ロングコート、ブーツと上下を象牙色で統一した出で立ち。
長身の彼のトレードマークであり、そしてよく似合っている。正直、中のスーツが黒なのが今イチなのだが、言っても変えない気がするので言ってない。
「まさかアンタがホストクラブに来るなんてね。女に飽きたのかい？」
我ながら下らないブラックジョーク。でもコイツには、何か言ってないとこっちが不安になる。
「仕事だ」
抑揚もない声が返ってくる。相変わらず付き合いが悪い。
「まあ……そうだろうね」
言ってオレは正面に座った。
普通ホストは客の隣りに座るモンだが、彼を客扱いする気はない

し、向こうもそうだろう。
しかし、不思議だ。
「何だって職場まで来たのさ？そんなに急ぐ内容かい？」
そう、今まで依頼人がここに来た事はない。
事件屋の仕事は、全て『待て葉』という酒場のマスターを通して受けている。こんな事は初めてだ。ましてこの男が……。
「早く用件を言ってくれよバイパー。もったいぶるのはアンタの悪いクセだよ」

バイパー・T・ホイール。

明らかに見た目東洋人のくせにクソ恥ずかしい名のその男を、同業者で知らないヤツはいない。
事件解決率がほぼ百とか、一キロ先の針を撃ったとか、噂だけでも人並み外れている。

その中でも一番有名なのは、『ナンバーワンの事件屋』という異名だ。

クセの多い事件屋たちの中でも、実力はトップだと囁かれている。
一緒に仕事をしたことがないので、『待て葉』で飲んでいる時の、ただの会話のしにくいおっさんというイメージしかないが。
そのバイパーがオレの催促に応じて、口を開いた。
「そろそろらしいからな」
「……は？」
訳が分からない。どういう事だ。
オレが言おうとしたその時、ドアを蹴破る音がした。
殺気――感じた瞬間、懐のナイフを投げた。
「……！」
ドアを開けた男は、ナイフを額に突き立てて、声を上げる間もな

く倒れた。が、その後、死体をまたいでもう一人。
銃を構えるなり乱射しだした。
慌ててしゃがみ込む、大勢の客とホスト。ガラスの割れる派手な音。
「あーあ、やっぱこうなるのか……」
溜め息をつく。
開き直って、もう一本ナイフを……あれ？
あ、今日一本しか持ってきてないや。
「やべ」
オレもテーブルの下に潜り込んだ。反撃する手だてを考えながら、ふと別のことが頭をよぎった。

（この襲われ方、どこかであった気がする）

すると、近くで別の銃声。マシンガンが止まる。
顔を出すと、男は倒れ、バイパーは銃をしまっている。最初っから、こいつがやってくれりゃいいのに。
「アイツらは何だ？　アンタを追ってきたのか？」
バイパーは立ち上がり、
「来る途中、尾行されていた」
言い捨てて、死体の転がった出口に向かった。オレは慌ててテーブルから出る。
「おい、待てよ仕事は！？」
背中を追うと、バイパーは死んだ男達の懐を探っていた。
しかし、彼らの素性がわかるようなモノはなかったようだ。
オレが前に襲われた時と同じパターン……という事は、もしや……。
「バイパー！」

思わずオレは、バイパーの肩を掴んでいた。

第三篇

「こいつらの身元を割り出し、所属する組織を見つける。それが依頼だ」
バイパーは静かに告げた。それに反するように、
「じゃあ、報酬の話だ。その組織をどうにかするっていうなら、一枚かませろ。それが報酬だ」
熱のこもった声が出た。
こういう仕事柄、熱くなるのはよくない。だが、母を殺した手がかりを掴むチャンスだ。例え、答えがノーでも、オレは一人で行くだろう。
「いつ分かる？」
オレの交渉は了承されたらしい。バイパーは訊いてきた。
割り出しに時間はかからないが、仕事用の準備をしたい。
「二時間後に連絡する」
「分かった」

ホストクラブを出て自宅へと戻る。マーカスから、店の補修費用は給料から天引きと言われた。
後でバイパーに請求するとしよう。
ウチに帰ると、引き出しからメモを取り出す。
その上に二丁の銃。襲ってきた連中のものだ。そして彼らの服のタグ。
着ていた物や扱う銃の流通を照らし合わせれば、入荷先の組織なんてのは一発で分かる。
（そうできるようになるまでに、随分と時間喰っちまったけどな……）
メモを繰って割り出しにかかる。
随分と古い組織の名が挙がった。最近、代替わりしたばかりで、

きな臭い噂が絶えない。
先代と比べて人望が薄い男なので、地盤固めに躍起なんだろうと踏んでいる。
分かれば後は準備して、それから電話だな。さっそく用意を――
「ヨフィエルさん、よろしいですか？」
その時、ドアの向こうから声がした。扉を開けると、見知らぬ男が立っていた。

第四篇

白亜の館というにはいささか悪趣味な建造物を、鉄柵の門扉越しに伺う。
屋敷をぐるりと囲む煉瓦の塀にも、やじりを模した装飾が施されている。だだっ広い庭には塀に沿って木立があり、門から庭の中心を突っ切るようにして、邸へと道が続いている。
待ち合わせは午前零時。オレの探しあてた、組織のボスの屋敷前。
もう時間になるが……。
遠くから排気音。
聞きなれた覚えがあるのは、所有者を知っているからだろう。車に対してオレは手を振る。
見えているのか、いないのか。

バイパーが乗った車は、真っ直ぐ門に突っ込んでいった。

（い！？）
驚いて目を見開くと、衝撃音が響いた。
鉄のきしむ音が耳に痛い。車は、玄関前の階段に車体をぴたりと横付けて止まった。
バイパーは車を降りると、いきなりボンネットに弾丸を撃ち込んだ。空いた穴から、ゆっくりと煙が立ち昇る。
屋敷の扉が開いた。
複数の影が飛び出す。騒音を聞きつけた部下たちだろう。バイパーを見つけると、彼を追い始めた。
彼は何故か、破った門へと走り出す。
当然、玄関前のバイパーの車を避けたり、飛び越えようと――
途端、真っ赤な炎が噴き上がった。
人影の幾つかが宙に舞うのが見える。彼の車の爆発は、扉から出

てきた連中を一掃したようだ。悲鳴がここまで聞こえる。
あまりのことに、オレは周囲を警戒しながらバイパーまで走り寄った。彼は庭の真ん中で煙草を咥えていた。
「おい！　アンタ、暗殺って言ったじゃないか！」
開口一番に怒鳴るオレに、
「暗殺だ。屋敷中の人間をな」
無表情な口調で返すバイパー。平然と言い返すその様に頭に血が上った。
オレは彼の煙草をもぎ取り、庭へ叩きつけた。
「これは暗殺とは言わないだろ！　それに！」
襟元を締め上げる。
「叩くのは頭だけじゃなかったのか？　不必要な殺しをするんなら、オレは降りるぞ！」
依頼で人は殺しても、無駄に命を奪ったりはしない。
それが掟だとオレは思ってる。
それが滑稽な事であっても、オレはそれをやり通さなければならない。

人殺しと事件屋……その隔たりをハッキリさせたいからだ。じゃなきゃ、オレは人殺しだ。母さんを殺した誰かと変わらない。

「依頼のためならいいのか？」
バイパーは苦しむ様子もなく、いつもの調子で返した。
「そうだ！　だから高額な金を手にできるんだろ？　だからオレはこの業界に入ったんだ。オマエもそうだろ、ナンバーワンの事件屋さんよ！！」
さらに力を込める。
バイパーは襟を締めつけられて、首がどんどん圧迫されていく。
彼はオレの言葉に肯定も否定もせず、黙ってこっちを見るだけだ。
オレは言いようのない焦燥感に駆られて、

「何とか言えよ！」
ナイフを取り出していた。
そんなつもりはなかったが、気付けばバイパーの鼻先にあてていた。
そんな自分に嫌気が差した。
早く何か言って欲しい。切っ先が震えている。ナイフを持つ手がこんなになるなんて何年ぶりだろう。
早く、早く、何か言ってくれ。そうすれば、刃を下げるきっかけになるから。
オレとバイパーは動かないまま、時間が過ぎていた。
その膠着状態を破ったのは、
（殺気！）
銃声だった。
店を襲ってきた時と同じ。扉からわらわらと兵隊が出てくる。オレとバイパーは急いで離れ、庭の木に隠れた。
え？
「テメエ、こんな小せえ木に二人も隠れられるかよ！」
「なら、オマエが出ろ」
オレのクレームに素早い回答が来る。意外だ。
「オマエ、普通に返事できるんじゃねーか！　いつももそのくらい早く返事しろよ！」
「覚えておこう」
「嘘つけ！　テメーは……おわ！」
弾丸がオレの頭上の木の幹をかすめていった。木の葉が髪にかかる。
（こいつら！）
オレは木に寄っかかると、そのまますべり落ちて座り込んだ。
頭にかかった木片を払い、大きく息を吐く。
「休憩か？　呑気だな」
バイパーは応戦しつつ、皮肉を言う。

そこでオレはこう尋ねた。
「バイパー、あいつらオレの通り名知ってると思うか？」
チラッと上を見ると、彼は銃に弾丸を込めていた。
「『投剣のヨフィエル』か？　知らないだろうな」
装填が終わると、再び戦闘を始めた。
オレは懐から四本のナイフを取り出す。適当に相手を見定めると、敵に向かって走った。
「一人、こっちに来るぞ！」
黒服の一人が叫ぶ。
二、三人がオレに引き金を引いた。叫んだヤツと合わせて四人か。銃声やら、弾丸が風を切る音が耳に入ってうるさい。オレは体勢を深く下げ、さらに速度を上げた。
「だ、弾丸が当たらない！」
「来るぅ！！」
脅える黒服たちとオレが交差する。
男達の胸元には一本づつ、ナイフが深々と刺さっていた。交差する前に二本投げ、通り過ぎる狭間に二本。
それぞれが不思議がったり、信じられないといううめきをあげて倒れた。
「て、てめえー！」
新たに駆けつけた一人が銃をかまえた。と、同時にオレは左手をふった。
銃をかまえた男がそのまま倒れる。オレは男の額に刺さったナイフを引き抜いた。
「次はどいつだ？」
血染めのナイフを光らせ、周囲の敵をたじろがせる。
ふと、視界の隅に動くものがあった。目線をやると、バイパーが走っている――

第五篇

それほど走った覚えはないが、随分と離れてしまった。
バイパーも移動しながら戦っている。距離が開くのは当然といえばそうか。
彼の銃が吼える度に、一人、また一人と倒れていく。
だが、いかんせん数が多い。あのままでは、囲まれてハチの巣だ。
助けに行こうと足を進めた……が、止められた。
バイパーの手が制止のサインをだしていた。帽子のつばで口しか見えなかったが、

「すぐ終わる」

――と言ったように見えた。笑っていた。
そんな矢先に、
「もらったー！」
バイパーが通り過ぎた茂みから、手斧を振りかぶった男が飛び出した。
バイパーは銃を向けたが、様子がおかしい。
弾丸がないのだろうか。
（ヤバイ！！）
思わず口に出しかけた時、
「ぐわっ！？」
手斧の男が吹っ飛んだ。
空いた手で殴ったのだろうか。しかし、間合いが遠すぎる。
何をぶつけたのだろうか。目を凝らすと、左の裾から何か垂れている。
（鎖……か？）
さらに目を凝らそうとすると、垂れていたものは彼の腕の振りに

つられて、うねりを上げた。
その独特な金属音は、鎖に間違いなかった。
「うわ！？」
バイパーに向かっていた集団の一人が鎖に捕らえられる。鎖を手足のように動かすその技術に驚いた。
（だが、一人を封じても――）
案の定、他の男たちがバイパーめがけて引き金を引く。
しかし、バイパーはその銃声にひるむことなく、勢いよく鎖を引いた。
全身の力で引かれた鎖は、絡めた男を引っ張りだすと、
「ぐわあー！！」
男は遠心力で振り回され、他の男達にぶつけられる。

「がはっ……！」
「あひぃー！！」
まるで鎖がま……分銅が少々大きいが、だからこその威力は凄まじく、バイパーは周囲の敵を一掃してしまった。
分銅にされた男は、用が済むと鎖を解かれた。
やっと自由になったその身は所々骨折しているらしく、悶絶しているようだ。バイパーに牙を剥く様子すら見えない。
（ムゴい戦い方をする……）
彼はよっぽど乱戦、対集団戦に慣れているのだろう。
「さて……そこのアンタら二人」
少し離れた男達に呼びかける。
二人とも体が震えた。
「残ってるのはアンタらだけだが……まだやるかい？」
尋ねると、二人は黙って銃を落とした。降参らしい。
「今夜で組織は終わる。新しい場所を探すんだね」
言い捨てると屋敷に向か――

ナイフを投げた。
男の懐から銃が落ち、それを追うように彼も地に伏した。
もう一人を睨むと両手を挙げた。完全に戦意を喪失している。
「投剣のヨフィエル。その名を知らなかったのがテメエらの敗因だ」
（知ってりゃ、無駄な血を流すこともなかっただろうに）
胸中で舌打ちすると、その場を後にした。

バイパーの乗ってきた車の残骸を横目に、屋敷の内部に入る。
大理石の柱。
絨毯。
絵画。
シャンデリア。
目に付く全ての、高価かつ悪趣味な調度品たちは、ことごとく破壊されていた。まるで台風の後だ。
横たわった死体をまたぎ、瓦礫を避けながら、向かうのは階段。
嵐の後を追う。
しかし、こんなに苦もなく先に進めるとはな。
一枚かませろと言った手前、色々と申し訳ない。
これだったら、依頼の時に何も言わず、後から……待てよ。

そういや、アイツはなんでオレに捜査の依頼なんてしたんだ。
『待て葉』のマスターに聞けば、すぐに分かる事じゃないか。ひょっとしたら、オレを関わらせる事自体が目的なのか？
（でも、それじゃアイツのメリットは何だ？）
バイパーが何かの依頼のついでというなら、やり方がまどろっこしすぎる。考えると混乱してきた。
（考えるのは後だ。この一件を済ませば、何かがわかるだろう）

気持ちを切り替え、再びバイパーを追った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8904a/

VTWシリーズ１　『蒼金の小銃』

2010年10月8日13時17分発行